

石川啄木「呼子と口笛」成立過程の内面的考察

近藤典彦

一、「呼子と口笛」成立直前の一過程

石川啄木は明治四四年六月一五日から一六日にかけて、長詩の構想の下に「はてしなき議論の後」の「一」から「七」までを制作した。そして六月一七日、北原白秋から新刊の「思ひ出」を受けとる。それは強烈なインパクトを与えた。衝撃は二重のモメントからなっていた。すなわち詩人としての唯一のライバル白秋の輝かしい成功がもたらしたある種の敗北感、そして白秋の詩そのものの美しさが

もたらした深い感動、である。⁽¹⁾

この章では右の時点以後「呼子と口笛」の制作直前までの過程を考察する。

I

六月一七日、つよい衝撃を受けたままで啄木は「八」の制作のためにペンをとったであろう。このときに「思ひ出」の衝撃のうちの二つ目のモメントが作用する。白秋の作品に底から感動し共鳴したことによって啄木は——これまでの人生でしばしばあり、白秋の詩との関係でもはつき

りと日記に記されている——かの経過とまったく同じ経過をたどる。つまり当の相手の作品にすっかり影響されてしまふ。山本健吉もいうように「自分が否定したものの圧倒するような魅力に捉えられてしまうのが、詩人啄木の本領」なのである。とくに「断章」三十五、三十六は啄木の過去の一時期を強くよみがえらせるものをもっていたのであろう。——その二篇を引こう。

三十五

縁日の見世ものの、臭き瓦斯にも面うつし、
怪しげの幕のひまより活動写真の色は透かせど、
かくもまた廉白粉の、人込のなかもありけど、
さはいへど、さはいへど、わかき身のすべもなき、涙
ながるる。

三十六

鄙びたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。
いそがしき活動写真煤びたる布に映すと、
かりそめの場末の小屋に瓦斯の火の消え落つるとき、
鄙びたる鋭き呼子そをきけば涙ながるる。

さて、問題の「八」である。第一、二連から見ても行こう。

八

げに、かの場末の縁日の夜の
活動写真の小屋の中に、
青臭きアセチリン瓦斯の漂へる中に、
鋭くも響きわたりし
秋の夜の呼子の笛はかなしかりしかな。
ひよろろと鳴りて消ゆれば、
あたり忽ち暗くなりて、
あたり忽ち暗くなりて、
薄青きいたづら小僧の映画ぞわが眼にはうつりたる。
やがて、また、ひよろろと鳴れば、
声嘎れし説明者こそ、
西洋の幽霊の如き手つきして、
くどくどと何事をか語り出でけれ。
我はただ涙ぐまれき。

されど、そは三年も前の記憶なり。

冒頭の「げに」という副詞はあることを受けてそれを是認したりする気持をこめて使う場合が多いが、ここもまたそうである。啄木は何かを受けて「げに」とうたいはじめたのだ。何を受けたのか。以上三つの詩を注意深く読む者には疑いの余地がなからう。「断章」三十五、三十六を受けたのである。したがって「八」はこれまでの「一」から「七」までの世界から一時切断され、白秋の世界から出立した作品なのである。

「八」と「九」についての評注はほとんどない。今井泰子⁽⁴⁾のものが最も詳しい。ただし、それは「八」の全般と「八」の中の「三年も前の記憶」「今も猶昔のごとし」「呼子」「映画」「口笛」についてふれているだけである。それ以上詳細にこの詩についてふれたものは管見のかぎりでは見当らない。今井の成果をふまえさせてもらった上で、本稿の目的に必要なかぎりの評注をなしつつ、成立過程を内面的に考察したいと思う。

「場末」とは浅草六区であろう。日記によると浅草へ行った初めの日付は明治四一年八月二一日である。この時は金田一京助が案内している。ふたりで「キノオラマ」を見ている。そして翌年六月一日までに啄木は合計一四回ほど映

画（キノオラマ）も含めておく）を見ている。四一年は八月二一日から十一月八日までの間に金田一と三回、吉井勇と一回、並木武雄と一回、一人で一回、四二年は金田一と二回、岩本某と一回、あとの五回は一人で見ている。このうち四一年一〇月二二日のものはあとでさらにふれるが、金田一とふたりで本郷四丁目の縁日の小屋で見たものであり、ほかはすべて浅草である（明治四一年十一月八日についてのみ推定）。詩の舞台を「三年も前」の事実を素材として設定しているとするれば——というのも啄木の詩作の方法一般を考⁽⁵⁾えあわせるならある場面とある事実とが素材としてあると見るのが妥当であるし、またこの時は強烈な衝撃の下にあり、虚構の世界を大きく築きあげうる精神状態ではなかつたであろうから——明治四一年のころのことであろう。八月二一日から十一月八日まで、それらはちょうど「三年も前の」「秋の夜」とかさなるのである。六回の映画のうち五回を浅草で見ているのであるから舞台はやはり浅草であろう。⁽⁶⁾今井は第一連全体の背後に「当時の啄木と白秋（だけでなく吉井勇らも加わるが）」との親しかった間柄、それにもかかわらず啄木が当時彼ら、特に白秋に対していだがずにいられたかった異和感が隠されている」（注4参照）とす

る。「断章」から出立したこと、そして第三連との関係も考えあわせるならそう考えることもできるが、わたくしはむしろこうとりたい。「断章」の世界にひきずりこまれた啄木が、三年前の世界とそこにいる自分自身とをうたったのが第一連であると。「断章」三十五、三十六は詩人白秋自身の青春の感傷であって、友、交友等のモメントは度外視され「人込みのなか」の孤独こそがうたわれている。啄木が共鳴し想起した点の一つはまさにそこであつたらう。したがって、ここでは白秋ら友人のことは脳裏に浮かんでいないように思われる。そのことは詩そのものを玩味することで感得せられることであるが、他方当時の日記からも裏付けが得られるのである。三年前の秋浅草で見た五回のうちはじめの二回は金田一と、三回目は吉井と行つたのであつた。日記によるとこれら三回においては啄木は映画をも浅草のにぎわいをも友とともに楽しんでゐる。ところが第一連にはよろこびも友の存在も感ぜられない。人込みの中の孤独な個人である。四回目の十一月一日の日記の世界にはこの第一連の世界に通うものがある。

「夜、なんといふこともなく心がさびしくて、人の多勢ある所へ行きたくなつた。そして八時頃にふらりと出かけ

て、四丁目から電車で浅草に行つた。電車の中に、目と鼻が、節子に似た女があつた。

日曜だから非常な人出であつた。予は先づ、富士館といふへ入つて、息苦しい程人いきれのする中で活動写真を見た。(中略)

足はいつしか塔下苑に進んだ。……O-Mitsu-san!……」

「三年前」の「秋の夜」の「場末」の「活動写真」、そして「ただ涙ぐ」む我がここいるように思われる。

自己の文学的「運命を極度まで試験」する決心で上京したこの年、小説はうまく書けず、食えず、住めず、何度も死にたくなつて金田一や宮崎郁雨らの援助でかろうじて生かした啄木にとってこの日はうれしい日のはずであつた。「鳥影」がはじめて「東京毎日新聞」に載つた日なのである。しかし実は屈托した日であつた。栗原古城の世話によつて「毎日」に小説を連載できさうだといつので一月一三日から一八日まで「鳥影」(一)の(一)から(二)の二まで七回分を順調に書きつき、これを栗原に渡した。これらの作品は一応の合格点を得たと見え二六日には掲載が正式に決定した。啄木は「驚喜」するが二七日に書いた(二)の三は不満足で、不満足のまま三日間を過ぐす。三一日栗

原に「続稿は二三日中に十回分許取まとめて」送るといつてやるがその日も翌一一月一日も書けない。二日「終日ペンを執つて、(二)の三を書改めた。そして遂に満足することが出来なかつた。」とある。一二月一日は書けぬ苦しむとあせりにじわじわとさいなまれていたと思われる。はじめて女を買うのもこの日である。そんな日の浅草の活動写真の小屋の中の自分。第一連はそれを素材としてうたってきたのではなからうか。

啄木はとりみだしている。これまでの「二」から「七」までの詩はどれも日本人の誰彼と五十年前のロシアの青年等とのイメージをダブらせてうたっていたのに、そのことを忘れてしまっている。忘れていけないのであればそこに戻ることができないままに第一連をうたつたのだ。啄木はふつと我にかえる。「されど」——つまり「断章」の世界にさそいこまれてうたつて来たけれど——「それは三年前の記憶」なのであった。自分は今、長詩「はてしなき議論の後」をうたっているのだから。その世界を創り出さねばならない。

はてしなき議論の後の

疲れたる心を抱き、

同志の中の誰彼の心弱さを憎みつつ、

ただひとり、雨の夜の町を帰り来れば、

ゆくりなく、かの呼子の笛が思ひ出されたり。

——ひよろろると、

また、ひよろろると——

我は、ふと、涙ぐまれぬ。

げに、げに、わが心の餓ゑて空しきこと、

今も猶昔のごとし。

「同志」たちによって表象されているのはどういふ人たちであるか。今井のように白秋、勇、李太郎、万里らととることはこの第三連では正しいかもしれない。第一連の世界は三年前の白秋的世界とつながっており、三年前の記憶からは吉井と映画へ行ったことも万里や李太郎らと議論した日々もなつかしく、かなしくよみがえってくることはいかにもありそうなことであるから。しかもこの長詩を載せる予定の雑誌「創作」の五月号によって彼らの消息を知っているはずであるから。というのは若山牧水が五月一日

啄木宅を訪れている。まちがいなく「創作」の五月号をおいていったはずである。そしてかつては啄木自身も属したパンの会の乱痴気騒ぎをなまなましく伝える「電気人形」を読んだはずである。また編集者の牧水からはさらに詳しいことを聞いていたかもしれない。「ヴ・ナロード！」どころか、泥酔し大声をあげ、泣き声をあげ、電車をとめ、そのランプ硝子を蹴破るかつての啄木の仲間たち。彼らは、当時の日本のれっきとした知識青年たちであった。それは啄木が期待する青年像とは遠く隔っていた。啄木は当然彼らに対して批判的であった。が、その反面、悲惨な生活の底にある二五歳の青年、啄木にとって彼らの青春謳歌ぶりがうらやましくはないはずがない。彼らの世界にひきまかれてゆく自分を感じずにはいられなかったであろう。「思ひ出」を読まよまでの自分はどこへ行ったのか。自分は彼らとどうに訣別したのだ。自分は自分の道を歩んできたのだ。われとわが心に鞭打って精神をたてなおそうとする。「心弱さを憎みつつ」とは誰よりも自分自身の心弱さをこそもっとも懂んでいるのではないか。それでも自分は三年前の記憶からも「断章」風からも抜け出せない。「ゆくりなく、かの呼子の笛が思ひ出され」るのである。「――

ひよろろろと、／また、ひよろろろと――」

第四連の「心の餓えて空しきこと」の内容はすでにほぼ明らかであろう。心が欲するのに満たされず空っぽだというのである。自分の真に達成したいことは何一つ達成していないという歎きなのである。三年前は小説に賭けて結果は失敗した。先日は「樹木と果実」が誕生を前に挫折した。またしても味わう満たされぬ悲しみは、ライバル白秋の輝かしい成功という衝撃の下にあつて増幅しつつ、「今も猶昔のごと」くだという。

次に「九」にはいつてゆこう。

我が友は、今日もまた、

マルクスの「資本論」の

難解になやみつつあるならむ。

「九」は右の第一連からはじまる。この詩はわかりにくい詩である。第二連で黄色い花片が散り、第三連で身の丈三尺の女が現われ、第四連で一度会合に出てそれきり来なくなつた女を思う。結び(?)は「明るき午後のものとなき静心なさ」の一行。「一」から「七」までの詩にはどれ

にもテーマがくつきりと提示されつらぬかれていた。展開には、すぐれた評論をものする詩人らしく論理があった。「八」は今見たごとく一つの情調でつらぬかれており、また四つの連は相互に内容的にも連関しつつ機能している。しかし「九」は各連の内容上の関連をとらえにくい。この詩はこれまで一度もまともに論じられたことがないのではなからうか。

次の二点をふまえることがこの詩を理解する上でのかぎを得ることになると思う。一つは、「九」もまた「思ひ出」インパクトの産物であってしかも「八」と同じように「思ひ出」のどれかの詩篇に強く浸されているであろうこと。他の一つは「八」の世界の情調をここにもひきずって来ているであろうこと。

前者から見てゆこう。「思ひ出」の次の詩を見られたい。

午後

わが友よ、

けふもまた骨牌の遊びにや耽らまし、

かの転がされし酒桶のなかに入りて、

風味よき日光を浴び、

絶えず白きザボンの花のちるをながめ、

肌さはりよきかの酒の木香のなかに日くるるまで、

わが友よ、

けふもまた舶来のリイダアをわれらひらき、

珍らしき節つけて『鶯鳥はガッグガッグ』とぞ、そぞ

ろにも読み入りてまし。

この詩の出だしを啄木は取り入れたにちがいないとわたしは見ると見る。「わが友よ、／けふもまた骨牌の……」「わが友よ、／けふもまた舶来のリイダアを……」と「わが友よ、今日もまた、／マルクスの『資本論』の……」との相似性は明らかであろう。

では第一連に「八」の情調をどのようにひきずりこんでいるであろうか。「我が友」の一語からそれを見てみよう。「我が友」。ここにも啄木が素材として思いうかべた人間があるにちがいない。「資本論」にとりくんでいることを条件として考えるなら、丸谷喜市しか浮かんで来ない。しかし次のような理由で丸谷ではないと考えられる。○「五」で丸谷のイメージは「経済学者N」としてすでにとらわれている。○「大学生のうちでは、当時マルクスをほんとうに

やろうと考へる者は「おそらくなかつた」⁽⁹⁾し、「当時の社会主義者の中にも、堺利彦、山川均を除くと『資本論』に取りついた人はいないようである」という。このように当時の「わが国の学界・思想界では、『資本論』は、難解で通つていた」というのに、理論経済学専攻ではなくて社会政策学専攻の東京高商専攻部学生の丸谷がドイツ語または英語で「資本論」と取り組んでいたとは考へられない。啄木の日記にも丸谷の「資本論」を暗示するものはない。

こうして、丸谷ではないとすると啄木の周辺の「わが友」の中に「資本論」を読む者はいない。であるなら誰であろうか。大方の意表をつくと思うがそれは金田一京助であるとわたくしは思う。「九」は「八」の情調をひきぎつている。「思ひ出」のインパクトを払拭しきれぬまままで「九」がうたわれはじめている。「三年も前の記憶」の中にあるいていた詩人がそこで、「八」の中で、思い浮かべずにはいられぬ人物があつたとすれば、しかも「八」の中では決してうたいえぬ人物であつたとすれば、その人が「九」の中であらためてとりあげられ、うたわれることは大いにありうる事である。その人物こそ金田一なのである。三年前の啄木は金田一なしには生きていられなかつたかもしれ

ない。それほどに生活上の世話になつて来た。また親しくして来た。「映画」といえば、初めて見たときを含め他人と一緒にいった五回(四一年)のうち三回までは金田一が一緒なのである。「八」で浅草の活動写真をうたつた啄木に金田一のイメージが浮かんでくることはいかにもありうることなのである。一〇月二二日の日記に夜も更けてから金田一と二人で本郷四丁目の「薬師の縁日」に行き「活動写真を見(一寸法師がゐた)藪でそばを喰つて帰つた」とある。第三連の「身の丈三尺ばかりなる女」とはこのときの「一寸法師」の形象であるかもしれない。

啄木は明治四四年の「夏時分」に金田一宅を尋ねていく⁽¹²⁾。ということはこの詩制作の前後に訪れたということである。四誌に詩歌の原稿を送らねばならぬ⁽¹³⁾のであるから、前は無理であろう。後ということならば「創作」「層雲」への送稿も終えてほつと一息ついた二〇日をすぎた頃以後で七月三日の発熱以前であろう。この詩をうたつてなつかしさがつり、また正月以来三度も金田一からの訪問を受けている返礼もかねて、訪れたということが考へられる⁽¹⁴⁾。さて、この金田一が研究者として机に向かつて難題ととりくんでいる姿に啄木は自分自身の姿を重ねてうたつたの

だと思われる。四四年四月二二日の日記に「毎日平民新聞やその後のあの派の出版物をしらべてゐる」とあるから「大阪平民新聞」(第六号、九号)に連載された「マルクスの『資本論』」(山川均)とは六月一七日以前にとりくんでいたはずである。山川の「資本論」紹介は日本におけるマルクス研究史の上で重要なできごとであると思われるが、極度に簡略化されてしかも未消化のままの内容紹介は明らかに「難解」をとりこしている。しかし啄木はその一字一字をていねいに筆写したのである。そのときの印象を金田一のそれと重ねたのでありとわたくしは想定している。

第二連。

わが身のまはりには、

黄色なる小さき花片が、ほろほると、

何故とはなけれど、

ほろほると散るとききはひあり。

「小さき花片が、ほろほると」散る、とここに突然うたわれるのはさきに引用した「午後」の五行目「絶えず白き

ザボンの花のちるをながめ、」がひびいているのだと思われる。「我が友」つまりは山川の「マルクスの『資本論』」にとりくんでいた自分、にひきかえ今の自分の「身のまはりには」「小さき花片が、ほろほると」「散るとききはひ」があるとうたう。高揚した詩想の、とくに長詩の構想の崩壊感でもあるだろうか。ものうさ。脱力感。「新しきインクの匂ひ」が目にと沁みた悲しみ、「ひとところ、畳を見つめてありし間の」⁽¹⁵⁾思ひ、それらからは脱け出しつつあるが、まだ氣力をふりしほってたちあがることのできないものうさの中に啄木はひたっている。⁽¹⁶⁾

さて今井がつとに指摘しているように「路傍の草花に」(明治四四年一月作)がここで想起されるべきであろう。「銀のやうな秋風が吹いて、／粟粒のやうな黄いろい花が／ほろほると散つてゐる。」と結ばれるこのきれいな叙情詩は、路傍の黄色い草花が媒介になって中学時代の回想に転ずるのであった。今また「黄色なる小さき花片」が散るとともに回想に転ずる。

もう三十にもなるといふ、

身の丈三尺ばかりなる女の、

赤き扇をかざして踊るを、

見せ物にて見たることあり。

あれはいつのことなりけむ。

「八」の世界とつながる回想である。この「見せ物」はさきに触れたように本郷での印象につながるであろうか。あるいは浅草のものであろうか。第一連と関連しつつ、ここに具体的な過去のある日が想起されるのである。

しかしこの回想がどうしたというのだろう。内面的に緊密な脈絡もなしに第四連に移り、「あの女」があらわれる。

それはさうと、あの女は――

ただ一度我等の会合に出て、

それきり来なくなりし――

あの女は、

今はどうしてゐるらむ。

見せ物の「三尺ばかりなる女」からふと連想したらしき「あの女」とはどんな女なのであろうか。「二」の「若き婦人の熱心に変りなけれど」の婦人ではない。「五」の「我

等の会合に常にただ一人の婦人なる、／＼でもない（この両者は同一人物として想定されているのであろう）。「熱心」でもなければ「会合に常に」出るわけでもない。そして「婦人」ではなく「女」である。「会合に」場違いに現われてそのまま来なくなった女、革命運動とは本質的に無縁の女である。いやこの詩の中では「会合」そのものが、また「資本論」が、場違いなのだ。

最後の一行。

明るき午後のもとなき静心なさ

この「午後」には白秋のさきの詩の題である「午後」がきいている。（そして「静心なさ」には紀友則の名歌「しづ心なく花の散るらむ」が遠くひびいているであろう。）さらに、第二連と同一の情調を見ることができると、

こうしてこの詩もまた、「思ひ出」によって強烈に撃たれて、その影響の中にすっぽりとつつまれてしまった啄木が明治四一年九月一日とまったく同じように（注②参照）白秋の詩（「午後」）の世界に共鳴しつつうたってしまったのである。

かくて、「八」と「九」は「二」から「七」までの世界とは別の世界、啄木的世界ではなくて白秋的情調に色濃く染めあげられた奇妙な世界となつてしまつた。「二」から読みなおしてくるなら長詩の構想の失敗は明らかであつた。「八」と「九」とはいわば啄木の詩ではない。「思ひ出」のインパクトはあまりに強烈であつたため、詩的精神の高揚は水をさされてしまつた。そして長詩の再構築をはかることはこの時点ではすでもう無理であつたのだから。今井・岩城の推定によると一八二〇日には原稿を発送せねばならぬ。「層雲」にも短歌をつくつて送らねばならぬ。(ついでにいは「明るき午後のもとなき静心なき」が「九」の詩の結びであるのかどうかは、現在の我々にはわからぬのである。「石川啄木全集」(筑摩書房)第二巻の岩城の解題によると、詩稿ノートのこの詩が記載されているページは、この一行のあとが切りとられている、という。)啄木は制作を「九」で打ちきつた。

今井は「二」を「序曲」、「三」〜「七」を「展開部」、「八」「九」を「終曲」としているが、一つの序章に二つの終章とはおかしいであろう。すでに見てきたことがらをふまえるなら、「九」は作者が終章として意識的にうたつた

ものであるとはみなされまい。事実、「二」とは何も呼応していない。したがつて「はてしなき議論の後」(二〜九)は終章がつくられていないのである。長詩としてはこの意味からしても未完であろう。

「長詩」「はてしなき議論の後」はかくて我々に遺された。

II

今井・岩城の考証では、啄木が「創作」の巻頭に載せるべく原稿を発送したのは六月一八日から二〇日の間であろう、という。わたくしもそれを正しいと思う。ただし送稿のための準備をはじめたのは六月一七日かその翌日であろうと考えられる。すぐあとで見ると、「思ひ出」の衝撃の下で二日も三日も苦しんで無為にすごす啄木では、すでないのだから。「創作」に掲載された「はてしなき議論の後」(二〜六)をさきの九篇とくらべるとき、準備の作業は二点にわたつてゐることがわかる。九篇を六篇にしぼる作業、しぼつた六篇を推敲する作業がそれである。

前者は次のようになされたであろう。「八」「九」二篇の

成立事情は今見てきたばかりである。これらを入れるか否かという問題は起こらなかつたであろう。問題はおそらく長詩の構想の下に序章としてつくられた「一」をどうするかであつたであろう。終章がないのであるから「一」は序章としての機能を失う。さらに「一」は「二」から「七」までに共通する要素（「成城文藝」一一五号三〇頁参照）をいくつかの点で欠いている。「はてしなき議論の後」という表題の中に「二」〜「七」とならんでは収まりきらぬ内容の詩なのである。割愛せざるをえない。こうして残つた六篇の詩に一から六までの番号がうちなおされることになる。

次に推敲に移つたであろう。目立つた推敲がなされているのは一四箇所である。⁽¹⁹⁾うち一二箇所の推敲は次に掲げるように「五」（呼子と口笛）では「墓碑銘」と題されるものに集中している。本稿における考察もまたここに焦点をしばらく（以下傍線は推敲された箇所）。

第一連。「彼を葬りて、すでにひと月を経たれど。」↓
「彼を葬りて、すでにふた月を経たれども。」

第二連。「彼の見えずなりてより、すでにひと月は過ぎたり。」↓「彼の見えずなりて、すでに久し。」

第四連。「然り、我もまた度度しかく感じたりき。」↓「然り、我もまた幾度かしかく感じたり。」↓「しかして、今やその眼の再び聞くことなし。」↓「しかして、今やその眼より再び正義の叱責を受くることなし。」

第五連。「彼の腕は鉄の如くなりき。」↓「彼の腕は鉄の如く、その額はいと広がりき。」

第六連。この推敲は著しい。まず四行からなるこの連は、次のように二行にまとめなおされる。「彼は二十八歳にいたるまで——／死ぬ時まで——その童貞を失はざりき。／彼は煙草を用ゐざりき、／また、酒を用ゐざりき。」

↓「彼は二十八歳に至るまでその童貞を保ち、／また酒も煙草も用ゐざりき。」そして次の二行が新しく加えられる。「彼は烈しき熱病に冒されつゝ、／猶その死ぬ日まで常の心を失はざりき。」

第七連。「その日の朝、我彼の病を見舞ひ、」↓「その日の朝、我は彼の病を見舞ひ、」。「その日の夕、彼遂に永き眠りに入れり。」↓「その日の夕、彼は遂に永き眠りに入れり。」

これらの推敲の特徴をまず見ておこう。
「はてしなき議論」より「実行」を、との詩人の思いを

担った労働者像が、第一連から第四連までに形づくられてくる。第五連と第六連ではそのような労働者の像に彫琢をほどこす。実行にふみ出す思想と意志とを持つ労働者像により具体的イメージを与えるための機能をこの二つの連が受けもつ。この詩がどこまで生きたものになるか、すなわちこの労働者像がどれだけ生きいきとしたイメージを読み手に与えうるかはこれらの連の出来不出来によって大きく左右される。啄木はこれらの連の推敲に力を注ぐ。第五連では「その額はいと広かりき」を新しく加えた。この一句は「彼」のすぐれた知的側面を支えるすぐれた頭脳を表現したものであろう。だがより注意したいのは、啄木自身が広い額の持主であった、という事実である。幼少のころすでに妹から「雨が降っても傘いらず」とはやされたほどの秀でた額である。「ふくべっこ」と友からからかわれ、のちに与謝野晶子が鷗外のそれとならべてほめたという額である。²⁹「広い額」というとき自身のイメージが重ねられなかったと考えることは不自然であらう。この推敲によって啄木は初めて直接的な自分の像の一部を「はてしなき議論の後」の中にもちこんだのである。第六連。新しく追加された「彼は烈しき熱病に冒されつゝ、／猶その死ぬ日まで

常の心を失はざりき。』。この二行もまた自画像化の問題とかわつて注目したい。明治四四年二月初めの入院後、彼は「熱四十度」あるいは「三十九―三十八」度、「氷嚢のお蔭にて眠る」といった（「烈しき熱病に冒されつゝ」の）生活を経験した。そしてその前後の小康状態の時にはクロポトキンの自伝を読み、友と婦人問題を議論し、雑誌「樹木と果実」発刊計画の進捗状態をしきりに気にする。新聞社に出勤できぬ衰弱と微熱の中で「平民新聞やその後のあの派の出版物をしらべ」トルストイの日露戦争論を筆写する（「猶……常の心を失はざりき」）。そしてこの詩制作直前とおぼしきころには次の歌をつくる。

友も、妻も、かなしと思ふらし――

病みても猶、

革命のこと口に絶たねば。

こうした事情を考えあわせるならこの二行もまた啄木の体験の意識的な投入であると考えてまちがいはなからう。啄木はこの推敲で自画像化を二箇所ほどこした（「呼子と口笛」制作時にはこの傾向はいっそう際だつ）。これがこの

過程の重要な特徴である。

次に以上の編集と推敲の過程の全体が意味するところを考えておきたい。おもえば生活上の窮迫と文学上の挫折に苦しんでいた啄木に白秋のもとから「邪宗門」が届いたのは二年前であった。日記はその日からローマ字となり、啄木はいわゆる「ローマ字日記」の世界に七転八倒することになった。しかしここにいるのは脱皮し成長を遂げた啄木である。社会科学を武器として「明日の考察」をすではじめた青年であった。あの頃より幾層倍の悲惨な条件が彼の内外を浸しているにもかかわらず、彼はもはや逃避などしないほどに成長している。二年間に、である。瞬時、惑溺した白秋的世界に今や訣別する。彼の思想的成長過程をふまえるならば、それは次のような決意と確認とをなしたことを意味する。

一、悲惨な生活諸条件の下にある自己を見つめた上でなお、この中を生きぬいて行く以外に自分の道はないこと。

一、彼自身が彼の「性格、趣味、傾向を統一すべき一鎖⁽²⁾」と規定した社会主義という思想的到達点を堅持して行くこと。

一、したがって文学上の仕事においても明治四二年末より

追求してきた道を歩みつづけるのであること。さらにまた当面の詩の問題でいえば白秋風ではなく自分に独自の詩を創り出して行くのであること。

「思ひ出」の強烈な衝撃に抗しつつ、啄木はこのように内面をたてなおし、闘いをさらにすすめる。その過程こそが編集と一字一字、一句一句の推敲であった。この推敲の一つ一つは衝撃の余韻をたちきってゆく具体的な内的闘争の過程でもあったのである。そのような過程の一つのヤマともいべき第五連、第六連の推敲において、「何時にても起つことを得る準備」ある革命的労働者の像に自己の特質を彫りこんだ事実こそ啄木内面の闘争の内実をもっとも明らかに示すのである。それはまた白秋的なものに対して啄木的なものが何であるかをくっきりと確認したこともある。そして啄木はさらに歩を進めようとする。啄木的なものをあざやかに示すべき、詩集「呼子と口笛」の制作を思いたつ。

さて、こうして推敲を終えた啄木は「創作」に原稿を送る。六月一八日から二〇日の間であろう。七月一日、「はてしなき議論の後」(一六)が「創作」巻頭を飾って人々の前に現われる。ここでは一応長詩の形をとっているが、

すでに見たようにこれら六編の詩を締めるたがとなるべき序章も終章もないのである。たがを欠くことでこれら六篇の各々は独立性を潜在させているのである。

注

(1) くわしくは拙稿「石川啄木『呼子と口笛』の成立過程を説明するかぎ」(『成城文藝』一一五号所収)を参照されたい。

(2) 明治四一年九月一日の日記によると、当時の「心の花」にのっていた白秋の「断章」にひどく感動した啄木は急に詩が書きたくなって「断章」そっくりの詩を一〇篇ほどもつくるのである。

(3) 山本健吉「漱石 啄木 露伴」(『文藝春秋』一二八頁)。

(4) 「日本近代文学大系」23 石川啄木集(角川書店)五五〇～五五一頁。

(5) 啄木の詩の制作の方法を示す一文がある。「其頃の詩といふものは、……空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素……の外には、因襲的な感情のある許りでであった。自分で其頃の詩作上の態度を振り返つて見て、一つ言ひたい事がある。それは、実感を詩に歌ふまでには、随分煩瑣な手続を要したといふことである。譬へば、一寸した

空地に高さ一丈位の木が立つてゐて、それに日があたつてゐるのを見て或る感じを得たとすれば、空地を広野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人にした上でなければ、其感じが当時の詩の調子に合はず、自分でも満足することができなかつた」(『弓町より』)。

これは彫塑でいえば乾漆像の制作方法に似ている、ともいへようか。心木または塑土の原型(詩の素材)の上材料(言葉)を盛りあげ、あるいは貼り固めてゆくのである。啄木がうたうテーマも素材もすっかり變つてしまつた。「空想と幼稚な音楽」「宗教的要素」「因襲的な感情」等はもはやない。しかし詩作上の方法の根底的なところには「あこがれ」時代も今も一脈相通うものがあるのである。

(6) 「我等の一団と彼」の中に「高橋」が浅草で「悪戯小僧」の映画を見る場面がある。

(7) 明治四二年二月二七日の日記に、空太郎、石井柏亭、山本鼎とパンの会に出席し、そのあと映画を見に行ったがはねたので帰ってきた、とある。

(8) 次の詩は明治四一年五月下旬すなわち上京後一カ月余の作である。「餓多て」の意をよく伝えて、よう。

いざ歌へ、絶間なき戦ひに
疲れはて、節々の痛む時、
いと苦き^な悲みの迫る時、

汝が子の死ぬばかり病める時、
母に似し物乞ひを見たる時、
汝が恋につくづくと倦める時、

物いはぬ空を見て、
いざ歌へ、その時ばかり、

あはれ、我が餓ゑたる者よ。

(9) 大内兵衛「経済学五十年」上(東京大学出版会)二八頁。

(10) 以上二つの引用は向坂逸郎「石川啄木と社会主義」(「唯物史観」三号 一九六六年 河出書房新社 所収)。

(11) 宮守計「晩年の石川啄木」(冬樹社)二六〇頁。

(12) 金田一京助「啄木遺稿」(東雲堂)所収「石川啄木略伝」一五〜一六頁。

(13) 啄木はこの月雑誌「新日本」「文章世界」に歌の原稿を
一五日以前に送り、「層雲」には歌の、「創作」には「はて
しなき議論の後」の原稿を一八日、二〇日に送っている。

注(1)に前掲の小論参照。

(14) 六月一七日という時点で詩の中に金田一のイメージが入
りこみ、さらに金田一宅訪問がなされたとすると、例の思

想的「転回」問題がからんでこざるを得ない。わたくしは
金田一の「転回」説を認めない。では、認めないこととこ
のモデル説や訪問の肯定とをどう整合的に説明しようの
か。それは別稿において示されるであらう。

(15) 「新しきインクの匂ひ、／目に沁むもかなしや。／いつ
か庭の青めり。」と「ひととこころ、疊を見つめてありし間
の／その思ひを、／妻よ、語れといふか。」は「思ひ出」
の衝撃をうたったものである。前掲小論参照。

(16) 「『呼子と口笛』をめぐって」(「国語国文研究」一九五九
年四月 所収)。

(17) 今井泰子、注(16)に同じ。岩城之徳「『呼子と口笛』の
成立をめぐる問題」(「国語国文研究」一九五七年四月 所
収)。

(18) 注(16)に同じ。

(19) 漢字とひらかなとの変換、句読点・送りがなの変更、
「創作」の誤植かとも思われるものなど些細な変更とみな
したものはこのうちに入れていない。

(20) 三浦光子「兄啄木の思い出」(理論社)二三頁。金田一
京助「終篇石川啄木」(巖南堂書店)二三頁。与謝野寛「啄
木君の思い出」(「回想の石川啄木」岩城之徳編 所収 一
三五頁)。

(21) 「石川啄木全集」(筑摩書房)第六卷二二六頁。

(22) 今井泰子はいう。「かの郊外の墓地の栗の木の下」に主人公の労働者がすでに葬られているのだから「かれ」は「われ」のすでに失われた夢である、と(注(4)に前掲の書四四一、五五四頁)。この解釈に対して一言しておきたい。

今井も認めているように「彼」(「呼子と口笛」では「かれ」)をうたうとき詩人の念頭に明治天皇暗殺計画と思われる。そして他の詩編とも同じようにある素材を(ここでは宮下太吉を)芯にすえて、その上にクロボトキンの自伝「Memoirs of a Revolutionist」にあるヨーロッパの革命的労働者像を重ねつつ、啄木自身の思いをうたっていくのである。宮下太吉はテロリストであった。啄木はテロリストの中に「言葉とおこなひとを分かちがたき／ただひとつの心を、／奪はれたる言葉の代りに／おこなひをもて語らんとする心を」見ていたのであった(「はてしなき議論の後」第二稿「二」)。そして宮下が、管野がついに「起」とうとしたことは、また幸徳らの「われとわが身体からだを／敵に擲げつ」(前掲)けようとした思想と行動とは激しく啄木をゆり動かさし、啄木を明治国家とのきびしい対決へと駆り

たてたのであった。前年八月の「時代閉塞の現状」からの六月までの、思索と研鑽とその成果とをここで論ずる必要はあるまい。それらの上に「はてしなき議論の後」の諸篇が、そしてその中の「二」がうたわれているのだ。作品が語るままに読みとるならば「彼」は啄木に「正義の叱責」を投げかける存在なのである。宮下らは約五カ月前に処刑された。そして幸徳は高知県幡多郡中村町に、宮下は甲府市の光沢寺に……とそれぞれ、どこかの(つまり「かの郊外の」)、「墓地の……下に」葬られているのである。そして死んだことによつてますます詩人に語りかけてくるのである。啄木は宮下らの声を受けとめ、それを自らの内面にとりこんだのである。そうでなくて、どうしてこれらの詩篇をうたいあげようか。内面にとりこまれたものが強靱で美しい言葉となつて奔出したのである。

わたくしの理解は簡単にいうと右の如くである。今井の理解とは根本的に対立する。

二、「呼子と口笛」の成立

この章では「呼子と口笛」が編まれる最終の過程を見ることにする。「創作」に原稿が送られるのと前後して（おそらく後に）「層雲」への歌稿が準備され送られたはずである。そしてこの間、つまり六月一七日から六月二五日までの間にはじめて、白秋の「思ひ出」に質・量ともに対抗する僕の詩集としての「呼子と口笛」制作を構想したと思われる。この白秋「思ひ出」への対抗という構想上の軸はこれまでに述べた経過によって推察できるだけでなく、今井も「石川啄木論」（塙書房）等で触れているが、ノート「呼子と口笛」と「思ひ出」とを手にして形式上の比較をすることによって明らかに見てとれる。

「思ひ出」が扉にたて書きの黒字で「思ひ出」としてあれば、啄木はノートに黒字で、左から右への横書きで「呼子と口笛」とする。次の化粧扉に白秋が右から左への横書きで「おもひで」と赤で刷りこめば、啄木は左から右への横書きで、赤で「呼子と口笛」と手書きする。赤帽のピニ

ローという二色刷りの口絵に対しては、ノートのすかしを利用したやはり黒赤二色の絵を描く。「思ひ出」には序詩と一九〇篇の詩の表題をしるした目次がある。啄木は目次に「家」までの表題を書きこんだあと、七ページあまりの余白をとる。最大限一七七篇の詩の表題が、少なくとも百数十篇分のそれが書きこめる分量である。また「思ひ出」の本文が赤い輪郭の中へのたて書きの黒字という二色刷りなのに対して、こちらは赤い表題と赤い日付、そして赤い TOKYO という書き入れ、黒い字で書いた本文——それもすべて左から右への横書きという斬新なスタイル——にしてある。こうして装丁から字の組み方にまで影響と対抗のあとが痛々しいほどに刻みこまれている。

さて制作の過程を見てゆこう。まず目次に百数十篇の詩が作られてもよいように余白が用意されていることに注目したい。「思ひ出」の詩の分量が啄木の念頭にあってのこの余白なのである。「思ひ出」は七つの章からなり、そこに配分された一九〇篇の詩の題材・形式・韻律等は多様で変化に富んでいる。啄木は制作の最初において自分の詩集もまた量においてのみならず詩の多様性においても負けなことをめざしたはずである。

その線に沿って手もちの近作九篇のうち「創作」に送った六篇を各々独立させ表題を与え推敲する。ここで注意すべきは、これら六篇の詩の、初稿における位置づけと「呼子と口笛」における位置づけとの間には本質的な差異がある。ということである。さきには序章「暗き、暗き曠野にも似たる……」にはじまる革命的な長詩構想中の六篇であった。「思ひ出」のインパクトのために完成できなかったが、一種の革命詩をめざしたものの諸環であった。しかしここではちがう。「呼子と口笛」は「思ひ出」に対抗する詩集であつて（おそらくは主として未来を、さまざまの角度からうたおうとしたものであろう）、革命詩集を直接の目的にしたものではない。かの時代、あれほども素材に乏しい時代に百数十篇もの革命詩の創作を意図することなど非現実的であることを啄木は見抜いているにちがいないのである。

とするとこれによって次の重要な一結論を導出することができる。「はてしなき議論の後」の「八」、「九」は明らかにトーンダウンしている、といえるのであつた。しかし、「呼子と口笛」の八篇を連続した作品群と錯覚し、六篇の革命詩の次に「家」があることをもつて啄木の挫折を論じ、また啄木晩年の「思想的転回」の論拠とするのは見

当ちがいもはなはだしいということ、これである。啄木の詩集制作上の意図からいえば、「家」も「飛行機」も——のちにあらためて検討するが——「呼子と口笛」にふさわしい詩篇なのである。ここに収録されるべき作品は外の誰のでもない、啄木の——明治四四年六月とそれ以後の啄木の——詩であることが根本条件なのである。したがつてまた白秋風の「八」と「九」は省かれるのである。

「創作」発表の詩稿から「呼子と口笛」所収の詩稿への変化の跡をたどってみよう。「創作」に送つた詩稿で「一」になつていたものには「はてしなき議論の後」という表題が与えられ四箇所に推敲がほどこされる。

「二」には「コリアのひと匙」の表題が与えられる。一箇所推敲される。

「三」と「四」はここでは入れかわり、「四」に「激論」という表題が与えられて三番目に置かれる。四箇所に推敲がなされる。

次いで「三」には「書齋の午後」という表題が与えられる。目立つほどの推敲はない。

「五」に「墓碑銘」という表題が与えられ一二箇所もの推敲がほどこされる。先の場合も今回も推敲はこの詩に対

して集中的になされている。

「六」は「古びたる鞆をあけて」と題されて六番目に置かれる。推敲はない。

「墓碑銘」の推敲のあとのとくに著しいものをあげてみよう。「創作」の詩稿の五連と六連はほとんど解体され、「墓碑銘」では銚直されて五連・六連および八連において再生される。

彼は労働者——一個の機械職工なりき。

彼の腕は鉄の如く、その額はいと広かりき。

しかして彼はよく読書したり。

彼は実に常に真摯にして思慮ある労働者なりき。

彼は二十八歳に至るまでその童貞を保ち、

また酒も煙草も用ゐざりき。

彼は烈しき熱病に冒されつゝ

猶その死ぬ日まで常の心を失はざりき。

これが次のようになる。

① かれは労働者——一個の機械職工なりき。

かれは常に熱心に、且つ快活に働き、

② 暇あれば同志と語り、またよく読書したり。

かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性質は

かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。

③ かれは激しき熱に冒されて病の床に横はりつゝ、

なほよく死に至るまで讒言を口にせざりき。

第七連は同じで次の第八連が加わる。

ああ、かの広き額と、鉄槌のごとき腕と、

しかして、また、かの生を恐れざりしごとく

死を恐れざりし、^④常に直視する眼と、

眼つぶれば今も猶わが前にあり。

傍線をほどこしたのはどれも新しく書きくわえられた部分の一部である。啄木はこれらの彫琢の際に再びクロポトキンの自伝第四部の中の八、九、一〇章を読みなおすか思

いかかべるかしたはずである。そこにはかのバリ・コンミン
ューンに前後する西ヨーロッパの最先進の労働運動の断面
と労働者像とが描かれている。それらを念頭におきつつ書
き加えていったにちがいないのだが、それにしても傍線①
の「熱心に、且つ快活に働き」は啄木自身の姿にあまりに
似ていないであらうか。

こころよきあはれこの疲れ

息もつかず

仕事をしたる後のこの疲れ

とうたった明治四二年四月二三日の日記には「第一版の校
了まで煙草ものめぬ忙しさ」であったこの日をふりかえつ
て「何に限らず一日暇なく仕事をした後の心持はたとふる
ものもなく楽しい」とある。小説「病院の窓」や「足跡」
などにある啄木自身とおぼしき人物の描写にも「烈しい気
象が眼に輝く」「活気の溢れた」青年があらわれる。「常
に」熱心に、快活にといのであれば明治四二年も秋以降
の啄木でなければならぬが。

傍線②が啄木の特徴でもあること論をまたない。

傍線③は「創作」への原稿にさらに大きく推敲してい
る。自画像化をよりくつきりと推し進めたのだ。この推敲
によって入院時の高熱を発していたときの啄木の体験がい
っそう重いひびきを帯びて伝わってくる。

傍線④は今井も指摘する^②ように四二年秋以降啄木が追求
してきたテーマである。それはこの推敲をなしつつある時
期にはすでに深く内面化されている^③。「常に直視する眼」
がわがものになっていることについては十分に自覚があっ
たはずである。したがってこの一句も彼自身の対象化なの
である。

このようにしてこの段階で四箇所にもわたって自画像化
をさらにすすめたのである。

さて、自画像化の意味するところについてはすでに見
た。同じことはこれらの推敲についても言える。ここでは
以下の指摘をなすにとどめよう。

先に述べたように啄木はこの詩を構想するとき詩の芯と
して機械職工宮下太吉を据えたのであった。しかし啄木は
豊かな知性に支えられた革命的労働者を目にしたことはな
いはずである。まして肌身を接するつきあいの経験はな
い。したがってそのような労働者像をつくりあげるために

初稿でまずなしたのは、クロボトキンの自伝の中からイメージをひき出し、芯の上に肉付けすることであった。この方法は最終の稿の第六連でも使われているが、二稿目(「創作」原稿)以後は、イメージ不足を補うに労働者(啄木自身、代用教員として記者として校正係として賃金労働者なのである)としての自己の美質を利用したのである。これによってどうしても抽象的になりがちな労働者のイメージの活性化をはかったのである。またこれによって——前述したことだが——これまでの人生の結果として到達している思想的見地・生き方——白秋らとまったく異なるそれら——を確認しているのである。つまり「挫折」や「絶望」とは真反対の方向に啄木の意識は向いているのである。こうして「墓碑銘」は完成する。今井が言うような「喪失した夢の大きさを言わんがための労働者の造型」のために、このような質の推敲をこれほど精力的にやるだろうか。労働者像に自画像を重ねることによって、最後の連の最後の一行「われには何時にても起つことを得る準備あり」は啄木自身の内面の叫びとしてより深く響いてくるのである。「挫折」者啄木、「絶望」の啄木はここにはいない。むしろ第六連の一行目に「不屈」の一語を加えたことも窮状の中にあつて

自らをふるいたたせる啄木自身の不屈の精神を証するのである。

「革命」を素材とする詩はこれをもって一応は終わった。別の素材を啄木は求めていたであらう。

六月二五日「家」を制作する。

家

今朝も、ふと、目のさめしとき、

わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、

顔洗ふ間もそのことをそこはかと思ひしが、

つとめ先より一日の仕事を了へて帰り来て、

夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、

むらさぎの煙の味のなつかしき、

はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び来る——

はかなくもまたかなしくも。

場所は、鉄道に遠からぬ、

心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ。

——略——

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、

—略—

さて、その庭は広くして、草の繁るにまかせてむ。
夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に
音立てて降るころよさ。

—略—

はかなくも、またかなしくも、
いつとしもなく若き日にわかれ来りて
月月のくらしのことに疲れゆく、
都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、
はかなくも、またかなしくも、
なつかしくして、何時までも棄つるに惜しきこの思
ひ、

そのかずかずの満たされぬ望みと共に、
はじめより空しきことと知りながら、
なほ、若き日に人知れず恋せしときの眼付して、
妻にも告げず、真白なるラムプの笠を見つめつつ、
ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

この詩を理解する上では第三連一行目の「この幾年」を
解くことが大切である。啄木が「わが家と呼ぶべき家」が
ないことのつらさを切実に感じはじめたのはいつ頃である
うか。宝徳寺退去後の盛岡時代、浜民の代用教員時代、北
海道時代と三年間をまず間借り生活している。はじめの二
つの時期は自らの天才を信じ、未来の文学的成功をほとん
ど確定的のこととして信じていた雄心勃勃たる時期であ
る。未来の成功（経済上のそれも含めた）を疑わぬこともあ
ってどの住いもほんの仮りのものとして渡り歩いてきた。
貧乏さえも意に介さぬように見える。北海道時代は楽しか
った函館、あわただしく、すぐに失職に転じた小樽、単身
で赴任して花柳界に通うことを覚えた釧路のどの時期の啄
木にも、家がほしいという思いを感じさせる言動は見られ
ない。啄木が住の問題ではじめて深刻に悩むのは明治四一
年七月下旬のことである。赤心館から強硬な下宿代催促を
されるのである。このときは「自分一身の死活問題を」
「何とか自分で解決せねばならぬ」と炎天下をほっつき歩
く。そして最後に北原白秋の家による。自分の窮状にひき
かえて白秋の生活事情はきわだたて恵まれており、非常に
うらやましく思う。この後二人の間に深い交流がはじま

る。そして啄木は白秋から夢のように思える柳河の「思ひ出」話を聞く。四二年六月には家族が上京し、喜之床の二階での窮屈な間借り生活が始まる。

こうして「幾年」というのは明治四一年夏ころからの三年間であろうことが推定されるのである。

さて、今啄木は喜之床の主人から立退きを要求されている。四月に「飢餓の恐怖」を日記に記した啄木は重ねて住居喪失の恐怖にさいなまれている。このとき再び啄木は白秋と白秋の柳河の家を思ったはずである。なぜならわずか一週間くらい前に金のかかった、しゃれた装丁の「思ひ出」を受けとっており、そこで強烈に白秋を思い白秋の詩に感動したのだから。そして「思ひ出」の中には柳河を描いた、名文「わが生ひたち」や多くの詩篇があるのだから。何より今「家」を制作するのも「思ひ出」の詩篇に對抗してのことなのであるから。かくて貧窮と住居喪失の危機にある現実、啄木の中に柳河の家に関するものもろものイメージをよみがえらせる。そして啄木は南国柳河の家に對して北方の漁民にわが家を建てる、観念の中で。

かくしてうたわれたのが「家」である。この詩は、①「はかなくも、またかなしくも、……空しきことと知りな

がら」家がほしいとうたったことで、②「古びたる鞆をあけて」までの六篇とトーンも素材も異なることで、長い間誤解を受けつづけている。②については既に解決した。それは「呼子と口笛」の基本的性格を把握できないがゆえの誤解であった（本稿七九頁参照）。ここでは①について触れておこう。

「はかなくも、またかなしくも」北の故郷に建てた家を夢見る主人公に（ひいては啄木に）、啄木の「弱さ」の露呈を見たり、「小市民的感覚」を嗅ぎとったり、逆にここにあら「弱さ」から前の六篇を照射してそちらの中に「暗い絶望」を見出したりする論者たちがいる。たしかに当時の啄木がその中であつた生活状況は悲惨であつた。その中であつて悲しみや苦しみを、また疲れをどんなにか重く深く感じたことであろう。これらを感じなければ人間ではなからう。まして多感な青年詩人においてをや。この詩にはたしかに悲しみや疲れを感じさせる旋律が響いている。しかし、重い病と家族の不和と「飢餓の恐怖」と住居喪失の危機の底にありながら、夢を「心のうちに思ひつづくる」のはむしろ啄木のオペティミズムの現われなのではあるまいか。まして他方で現実を「直視する眼」をもつ啄木は、そ

の願いを「思ひつづくる」ことが「はかなくも、またかなし」いことであることをも知っているのである。それを知っているながら、夢を歌う。この構造の底には、すでに諸家によって指摘されているように、評論「田園の思慕」で展開された見地が横たわっているのである。啄木はその評論の中で次のように言う。「産業時代といはるる近代の文明」が都市と農村との対立を深め、「田園にゐる人の都会思慕の情」をまた、「都会に住む者の田園思慕の情」を日一日と深めている。わけでも「都会に住む者の田園思慕の情」は「絶望的であり、消極的であ」り、「またそれだけ悲しみが深い」。そして自分はその田園の思慕を「感情に於てでなく、権利に於て」棄てず、逆に深めてゆく、と。そのあとにほとんど注目されぬ次の一文が続く。「私は現代文明の全局面に現はれている矛盾が、何時かは我々の手によつて一切消滅する時代の来るといふ信念を忘れたくない」と。宮守計の正しい推定⁶どおり、啄木は明治四三年七月から八月にかけてすでに幸徳秋水訳のクロボトキン「麵麴の略取」を読んでゐる。この著作の内容をふまえるなら、この「我々の手によつて」とは「社会革命」によつての意である。つまり「社会革命」によつて「現代文明の……矛

盾」の一切を「消滅する」のだとの壮大な展望の中で、啄木はクロボトキンをふまえてこう文章を結ぶ。「安^{ウニルヒンダク}楽を要求するのは人間の権利である」と。「都会に住む者」の問題をこのようにとらえている啄木にあっては「かずかずの満たされぬ望み」をもちながら「月月のくらしのことに疲れゆく」「都市居住者」が故郷を思慕し、そこに贅沢ではなくとも満たされた「家」の夢を描くことは「安楽を要求する」ことに通じるのであり、それはやがて「人間の権利」なのである。そしてこの線に沿って啄木の意識をたぐつていくなら、それは革命への翹望につらなっているのである。またこの面に着目してみるなら前六篇の詩とも一脈相通じてゆくのである。

「家」に流れる抒情の質とそれをうみ出す仕組みは「一握の砂」の回想歌群のそれに近いと言えるだろう。

この詩の中に弱さの露呈、小市民性を見る見方に対する批判はかなり多く出てきているが、この一見トーンダウンした詩も「はてしなき議論の後」の一七篇と「飛行機」とに共通の分厚い思想的基盤の上に生い育ったものなのである。ただし、革命の詩の制作を詩人は意図していないのだが。

六月二十七日「飛行機」を制作。

この詩にもまず「絶望」をよみとろうとする人々が少なくない。それは先入見をもってこの詩に対しその上に誤解を重ねてゆくからである。そうした誤解の外に粗雑な読みをしている人も多い。

飛行機

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が

たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたつた二人の家にあて、

ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に

飛行機の高く飛べるを。

この詩を正しく理解するためのキーワードはもちろん「飛行機」である。⁽⁸⁾ 啄木が飛んでいる飛行機を実見した可

能性は少ないであろう（見たとすれば代々木原で四三年一二月のことであろう）。ところで啄木には飛行機に関するどのような情報がいっていたのであろうか。啄木の飛行機のイメージに関する手がかりをつかむために彼が最も確実にそして全面的に目を通していたと思われる「東京朝日新聞」を調べてみた（今回はこの一紙のみを明治四三年九月から四年六月二十七日までに限って調査したにすぎない）。別の機会に詳細はゆずることとして、ここでは「飛行機」理解にかかわる記事の要点を列挙してみよう。

一、製作上の数知れぬ失敗、飛行の失敗（顛覆、墜落、死傷等）と交錯しつつ、しかし着実に、次々と、製作・発明・飛行実験は成功を収めつつあること。

一、飛行機というこの新生の事物にとりつかれた人々は軍関係者、民間人を問わず日ましに増加しつつあり、失敗はおろか死の危険さえものともせずこれと取りくんでおり、あきれるばかりのエネルギーと大胆さを示していること。

一、一般の人々もまたほとんど熱狂的に飛行実験の成功をよろこび、さらなる成功を願っていること。

一、飛行機は自分達の飛行の夢の担い手でありかつ、目の

前を飛び立ち、高く（あるいは低く）舞って再びそこにもどってくる身近な存在としてあり、心理的な隔絶感がないこと。

一、実際に見物できなかった人々も新聞などで高く飛ぶ写真ばかりかえし見ており、飛行の様子も生きいきした報道によって知っていること。

一、飛行機の将来性についてほとんどの人々はもはや疑っていないこと。

以上である。

さて「東京朝日新聞」の一〇カ月分から飛行機の像をつくって簡潔に示すなら、夢を持った男たちの夢を現実にかえつつある営みの、そして繰りかえず失敗をのりこえて前進する英知・不屈の意志・楽天性の、それは象徴である、ということになろう。このような当時の普遍的な飛行機像は、先見性と洞察力に富む啄木にあっては非常に鮮明にイメージされていたであろうことは想像にかたくない。

啄木の「飛行機」制作時に近い六月八日から一〇日にかけての記事は特別に精彩に富んでいる。

一、六月八日付。大見出し「見事なる飛行」、小見出し「徳川大尉の操縦ぶり 村木武官長の讃辞」の記事は「夕風に

吹かれて小川のほとりの水鶏の声を聞き朝の空に飛行機の飛ぶのをみるのは心持の好いものだ」といい、さらに「其形鳥に似たブレリオの飛揚するのを見れば大鵬の扶搖に駕して上る九萬里の概がある」と報ずる。同じ面に早くも面白い広告があらわれる。夏雲の湧く大空に飛行機が高く舞う絵が描かれ、「菓子界の飛行機へ 森永のミンツなり ハート形美術罐入 一個僅ニ五銭」とある。全体の枠は縦五・八センチ横八・五センチの長方形である。

一、六月九日付。大見出し「壮快なる野外飛行」小見出し「▽只見る天空の黒一点▽高さ一千四百十九尺」。徳川大尉はこの日（八日）、ファルマンで四回練習飛行ののちブレリオで飛ぶ。「見よ、飛行機の影は次第に小さくなつて鳥の如く虫の如く凄じい推進機の音も聞こえなくなつたではないか、壮快！ 壮快！ 只見る蒼空の黒一点、而も飛行機は依然として四十五哩の速力を以て進みつつある」とそれは報ぜられる。まるで「見よ、……かの蒼空に／飛行機の高く飛べる」イメージそのままではないか。

一、六月一〇日付。九日は所沢・川越間の往復飛行を試みた。徳川大尉はファルマンで成功。さらに二度目ブレリオで試みる。これがエンジンの故障で仙波村の麦畑に不時

着。畦に車輪をひっかけて顛覆、徳川と同乗者はけがをし、壊れてひっくりかえった飛行機の中にとじこめられ、農民に助けられる。

一、六月一三日付。ファルマン、ブレリオ、グラデー式の三機は飛べず。ライト機だけが飛んで飛行試験終わる。この記事のあととはほとんど記事がなくて二六日付で大阪の民間人が飛行機の試作に成功の報がある。

六月九日付の大成功の記事と翌一〇日付の大失敗の記事とは「飛行機」制作に大きな影響を与えたと思われるが、啄木が着目し、とり出すのは成功の側面、「今日も」「蒼空に」「高く」飛ぶ側面なのである。啄木の精神の、思想の能動性とこのこととは深くかかわっているのである。

以上をふまえて詩にもどろう。杉浦民平のように「飛行機」を「希望の象徴」とするの⁽¹⁰⁾はすつきりとした正しいとらえ方であると思われるが、「空想」「空想に近い希望」「憧憬」「夢」等の象徴とするのは当時の普遍的飛行機像にたらずと微妙な誤解を含んでいる。ともあれそれらは評者の描く啄木像の表現ではある。

詩人は「見よ、……」と呼びかける。誰に對してか。この詩の全体構造をもふまえるなら呼びかけの対象は他者で

なければならぬ。その呼びかけは即、反照して自己への呼びかけであるとしても。

「今日も」。決して毎日飛んでいたわけでもない飛行機を「今日も」とうたうのは詩的誇張である、ともいえる。しかしさきに瞥見したところからも察せられるであろうように、度重なる失敗をのりこえて日夜飛行機製作や飛行実験にとりくむ人々の精力的な営為を思いうかべるなら、飛ぶニュースを聞くごとに「今日も」と思うのは不自然でない。まして三月中旬から六月中旬にかけて飛行機関係の記事は非常に多い。このような飛行機をめぐる事情と、希望を日夜あたためつづけ、目ざしつづけている啄木内面のありようとは、共鳴せずにはいなかったであろう。したがって言うまでもないことながら、「今日も」は啄木内面のありようの表白でもあるのだ。⁽¹¹⁾「飛行機」は、「蒼空」に、「高く」、飛んでいる。

「見よ」と呼びかけられた他者は第二連に簡潔な表現でその姿を現わす。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、

肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

詩人が呼びかけた対象は「給仕づとめの少年」である。安い給料の貧しい少年であり、「たまに非番の日曜日」というのであるから、新聞社のような勤務時間が不規則な職場で働いているのであろう。「A LETTER FROM PRISON」からは東京朝日新聞社にも知的に勤勉そうな給仕が勤めていたことがわかる。「肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて」。今井泰子はこう言う。「『肺病やみ』は当時に一般的には不治の病い。……少年の病気感染もほぼ時間の問題」である、と。これは暴論であらう。啄木の父一禎や娘京子は非常に長い間「肺病やみ」と同居したのに肺結核で死にはしなかった。当時は同居の患者が一人出たら一家全滅というのであれば、肺結核はヨーロッパ中世をおそったペストよりこわかったことになる。詩人は「肺病やみの母親とたつた二人の家」という規定を与えることで、「少年」の貧しさに奥行きを与え、同時に「少年」が夢を実現するためには、まだまだ苦闘がつづくであらうことを暗示したのであると思われる。「少年」は「たまに非番の日曜

日」だというのに、いや「たまに非番の日曜日」だからこそ「せつせとリイダアの独学」をしている。英語の独学を積み重ねていつか彼は自分の思ひえがく夢を実現しようがんばっているのである。よし、それが長期の苦闘を要するとしても。

ところでここでわたくしは相馬庸郎の『ローマ字日記』⁽¹²⁾について示された卓見を想起せずにはいられない。浅草の娼婦たちの、客引きの老婆の、下宿屋の女中たちのすぐれた形象を日記に残したのは啄木が彼女らの苦悩に肉体的に同感しないではいられなかったからだ。そして自分のところに転がりこんできた岩本、清水という二青年の状況と苦悩を見ると自身が窮乏の極にあるのに、到底他人事と考えてはおられず援助を惜まなかったのも啄木の本質の同じような現われであったのだ、と。こう相馬は言っている。社会の下積みになっている人々（わけても青年たち）に対するこのような同情はやがて明治期の「強権」の認識とともに、強権の下にあって闘う人々への同情ともなり（明治四三年）、さらにそれは国境を越えてツァーの压制の下にある人民と压制と闘う青年たちへの満腔の同情となって煮えたぎるにいたる（明治四四年一月）⁽¹³⁾。

であるならば明治四四年六月二七日段階での啄木が「給仕づとめの少年」に呼びかけたとき、この「少年」が単に一人の貧しい少年の意にとどまるはずがない。貧しく、名声もなく、地位もないが、現状を克服し自らの未来を切り開こうと苦闘し、疲れ、それでもあきらめることなく屈することなく（「せつせと」励む無数の少年たちに詩人は呼びかけるのだ。そして「少年」の背後に「肺病やみの母親」を見ているように、無数の「少年」の背後に明治社会の至みの下にくるしむ無数の人々、民衆をも見ているのである。

同時にこの「少年」は多くの評者が指摘するとおり詩人自身の分身という側面を持っている。「少年」と啄木自身とのある共通項は明らかだ。しかし「少年」が他者である、ということが主要側面であり、何よりもその他者たる「少年」への呼びかけが「見よ……」なのだということを見落としてはならない。このことをしっかりとつかまないと人は「飛行機」を希望（空想等々）の象徴だとしておきながら、それが、だれの希望なのかということさえあいまいにしたままでこの詩を論じたりする。「少年」の希望なのだといえない人もある。

ところで、この第二連が直接に呼びかけの対象を描いておらず、呼びかけの対象がその中にいる生活的現実を描いているのだ、ということにも注意せねばならない。詩人は「少年」のかたわらにいて彼に呼びかけているのではない。詩人は少年のかたわらにはいない。詩人はその想像力豊かな心によって飛翔し、巷間にはいつて行ったのである。しかも「見よ」と指し示す人として巷間にはいつて行ったのである。そして詩人の目はそこに「給仕づとめの少年」の生活を見出し、彼のかたわらに立つ。「少年」はやがて民衆であった。したがってまた民衆と肩を並べて立つ。そして「見よ」と呼びかけるのだ。この詩における詩人のありようは明瞭に「ヴ・ナロード」民衆の中へ」なのである。「ヴ・ナロード！」と思えども果たしえぬ詩人はこうして詩の世界においてそれを果たしたのである。

さて、「少年」の勉強は恵まれた条件の下で順調にすすむわけではない。何もかもが恵まれぬ中での「独学」である。その「ライダー」にとりくんでいる目は疲れていることだろう。詩人は呼びかける。その目を上げよ、と。かくてリフレーンはりんりんとひびく。

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

詩人は鼓舞する人である。そして「少年」が詩人自身でもあるかぎりでは鼓舞される人（自らを鼓舞する人）でもある。

最後に、「飛行機」についてさらに一言しておきたい。以上の叙述をふまえるならば「飛行機」はもはや単なる「希望」ではありえない。それは無政府主義・社会主義でなければならぬ。もちろんそれに単純化してしまつてよいとは思わない。「少年」（「民衆」）がいただくさまさまの希望（また詩人自身のさまさまの希望）であつてよいのだが、しかしその無数の希望は「飛行機」が一点であるように一点に収斂してゆくはずである。啄木は自身が実現不可能と思ふ夢を人々に指し示すような詩人では、もはやない。「現代の社会組織、経済組織、家族制度……」の問題を、したがつて民衆のさまさまの苦悩を統一的に解決しうるのは無政府主義・社会主義であると信じていたのである。したがつて「飛行機」はそのようなものとしての無政府主義・社会主義なのである。

「はてしなき議論の後」にはじまる六篇と「家」「飛行機」とは素材において異なるが、通底するものは啄木の思想的本質としての無政府主義・社会主義であること、このことは確認できたであろう。したがつてこの詩集は未来を、「あこがれ」をうたおうとした詩集である、とも言える。「否定の否定」である「あこがれ」を。

この後啄木は詩をつくらぬことがまた「挫折」の啄木像の上塗りのための材料とされる。しかしこのことについては別の機会に論じたい。

かくて未完の詩集「呼子と口笛」がわれわれの手に遺された。成立の内的過程を探らうとするわたくしの試みは以上のごときものとなつた。

注

(1) 「はてしなき議論の後」の「一」が省かれているについては、啄木の頭の中に序章に続くすべての部分がなくなつたことで「呼子と口笛」の中にはまだ位置を見出していなかったこと、にその理由を求めたい。

(2) 前章注(4)に前掲の書、四一三頁。

(3) 内面化の一例として石井勉次郎「私伝 石川啄木 終章」

(和泉書院) 一三〇～一三二頁の叙述を参照されたい。

- (4) 啄木が白秋から白秋幼時の柳河の家に關する話を聞いて、それを知っていたことは次の金田一の証言によって裏づけられる。「北原白秋氏が見える様になつて、この人には、心から羨ましがつたり、感心したり、慕つたりしてゐた。白秋氏の帰つたあとは、すぐに私の室へ来て、その談、その言葉を、そつくりそのまま私へ取次いで聞かせたものだつた。それは石川君の貧しい生活から見ると、打つて變つてまるで夢のやうな生活だつた。その全く物語めいた話に、話しながらも陶醉したり、興奮したりして私へ語つた。目を円くしたり、細くしたり、首をひねつたりしながら」(前掲「終篇石川啄木」一七三頁)。これは啄木の日記から察するに明治四一年一月頃から四二年二月頃までの間の出来事であろう。

- (5) この一行は「家」における「はかなくも、またかなしくも……空しきことと知りながら」と響きあうと思われる。この一行はそれのみを見ると悲觀的な情況認識の発露とのみ誤解されがらだが、この評論の思想的基盤はすぐあとに見るように分厚く広い。逆に言うと「家」における「はかなくも、またかなしくも……」といった語句にとらわれすぎると「家」の基底を貫く、強くたくましい啄木の精神と

思想とを見失うのである。

- (6) 「晩年の石川啄木」(冬樹社) 一〇九～一一〇頁、一一三頁。
(7) 「座談会 啄木と明治・啄木と現代」(猪野謙二 平岡敏夫 今井泰子。「国文学解釈と鑑賞」一九八五年二月所収)。

- (8) このキーワードをもっともよく論じたのは蒲池文雄「啄木の詩『飛行機』について」(『愛媛大学教育学部紀要』第二部一の一 所収)である。氏が依拠した「航空五十年史」(仁村俊)を今回は見ることができなかった。詩についての理解はともかく、飛行機そのものについての理解において、わたくしのそれは氏に近い。

- (9) 志賀直哉「暗夜行路」第一の九にもこうある。「自分はマースといふ飛行機乗りが初めて日本で飛行機を飛ばした日の事を憶ひ出す。滑走から、機体が何時か地面を離れ、空へ浮んで行く、其瞬間、不思議な感動から泣きさうになつた。此感動は何から来たか。充奮かうふんしきつた群衆心理からも来たらう。……」

またマルクス主義哲学者古在由重はその著「人間讃歌」(岩波書店)の中で自分の少年時代にあつて飛行機こそ「無限のロマンチックな夢をはらんだもの」であつたことを生

さいきと描いている。彼は一九一三年（大正二年）のある日、墜落事故があいつぎ三人の死者が出た直後に、ついに飛行家になることを決意したのだという。

(10) 「石川啄木」（福村出版）九五頁。

(11) 今井の前掲書（前章注4）補注二五一に「今日も」についての詳しいコメントがある。しかし明晰な今井にしてはめずらしく文章が混乱している。したがって特定の箇所を引いてわたくしの見解を対置することはできない。

(12) 相馬庸郎「日本自然主義論」（八木書店）所収。

(13) 「平信」（「石川啄木全集」筑摩書房 第四卷 三六八～三七五頁）。

(14) 「石川啄木全集」（筑摩書房）第六卷 二二六頁、第七卷 三四一頁参照。

※ 本稿は、成城学園教育研究所の一九八四～五年度研究助成による研究の一部である。